その後、水の件は加藤が粘りに粘って解決した。何のことはない、小屋の裏手の沢から水はジャンジャン出ているではないか。「ない」でなく「あげない」のである。

当日、テン泊は4張・１５名程（スキー板を数えた）。土曜・日曜の朝に全員「沢の下の方」で用を足すと、約１００ｇ×１５名×２日＝約３０００ｇ。の「黄金が埋蔵」されることになる。

もちろん、それは今回だけでなく４月から５月にかけて毎日、毎週続くであろうから、その量たるや半端でなく、膨大かつ重厚なものになると予想される。小屋は自分の家の回りに「黄金」をまき散らされて平気なのか。この貴重でかけがえのない自然環境が汚染されるのを黙認するのか。それまでして、小屋のトイレを貸せない理由があるのだろうか。その神経はとても理解しがたかった。

山岳における山小屋の存在とは一体なんであろう。安全登山の確保、遭難の防止と救助、快適な山岳山行の提供、自然環境の保持と啓蒙などであり、ただ単に登山者を宿泊させ利益を得るだけが業務ではない。

むしろ山小屋は無法な登山者に眼を光らせ自然破壊、汚染から周辺を守らなければならない使命、努めがあるのではないか。

積極的に小屋のトイレ利用を進めるべき立場の者がまさか「野キジ」を推奨するとは。山小屋の姿勢も地に落ちたものである。

それとも、ほとんど「儲け」にならない「テン泊」登山者の施設利用は一切認めないというのか。考えたくはないが、水の一件からも十分うなづける。

結局、私達は「野キジ」は信念に反すると２日、４名、７回（１名は１回だった）分、約７００ｇの「黄金」を、栂池スキー場トイレまで背負い下ろし処分した。私達は「黄金運搬」は何回か経験しているので、特に問題はない。それを実践するのはとても気持ちの良いものである。

最近、各方面で「黄金」の持ち帰りが議論されるが、いっそのこと垂れ流しの小屋泊りは全員「黄金運搬」したらどうか。随分スッキリするだろう。また山岳雑誌などで立派な登山記録を目にするが「黄金」を下ろした記録は皆無だ。言い換えればバリエーションのテン泊登山は「黄金」をまき散らした「臭い」記録なのだ。岩場だから持ち帰れないなど、甘ったれた言い訳に過ぎない。

要は登山者の「心意気（やる気）」と「習慣」である。慣れれば要領も分かり２～３日は全く問題は無い。運搬用具など発砲スチロールでいくらでも、自作出来る。

最後に、山小屋は公共物で山岳関係者の共有の財産であるから、そこに恣意があってはならない。互いの理解と協力でかけがえのない、山岳環境を守る努力を続けるべきではないか。

【NO・63　01・05・06】